

東日本大震災後のスポーツ大会実施状況と被災地のスポーツ活動状況に関する調査

研究代表者 健康・運動学系 小川 宏

1. 調査研究の目的

3.11に発生した東日本大震災によって多くの地域が被災し、従来行われてきたスポーツ大会は変更を余儀なくされた。そこで本研究では、岩手、宮城、福島、茨城各県のスポーツ協会・団体に対し、各協会が震災後のスポーツ大会にどのような対応策を講じたのかについて、アンケート調査を実施した。また、岩手県および宮城県の沿岸地域に出向き、震災後のスポーツ活動状況について、インタビューによる調査を行った。

2. 調査研究組織

<研究代表者>

健康・運動学系 小川 宏

<研究分担者>

健康・運動学系 杉浦 弘一

3. 調査研究計画・方法

1) アンケート調査

対象：岩手、宮城、福島、茨城各県の各スポーツ種目協会・連盟（バレーボール、バスケットボール、サッカー、テニス、野球、陸上競技）

調査内容：

- ・インターハイ県大会への対応（会場変更、被災地域への配慮、運営方法変更、放射線被曝による対応等）
- ・高校選抜大会県大会への対応
- ・高校県総体への対応
- ・中学生総体県予選大会への対応
- ・小学生全国大会県予選大会への対応
- ・一般の大会への対応
- ・震災により中止になった大会数、震災のために新たに開催した大会数

調査方法：アンケート用紙を郵送し記入後返送

（20団体に送付し9団体から回答あり。回収率45%）

2) 現地聞き取り調査

対象：岩手県大船渡市、宮城県石巻市、牡鹿郡女川町、宮城郡松島町のスポーツチーム指導者、小学校教員、スポーツクラブ管理者

調査内容：

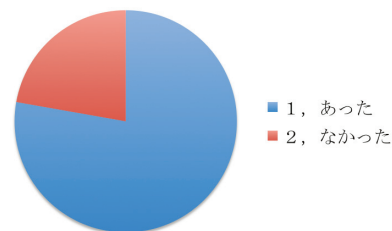
- ・震災後、スポーツ活動を再開するまでの経過
- ・現在の活動状況
- ・震災前と震災後で変化したこと、等

調査方法：インタビュー

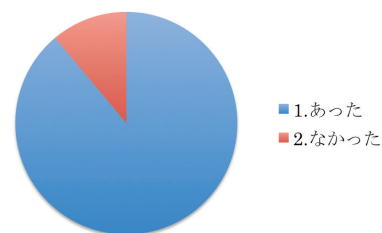
4. 経過や結果

1) アンケート調査

①高校総体県大会の会場変更があったか？



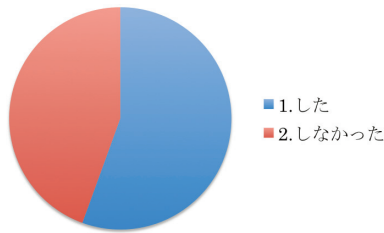
②高校総体県大会で被災地域に配慮はあったか？



③高校総体県大会でどんな配慮をしたか？

- ・ユニフォームなど用具の特別措置（5件）
- ・宿泊の配慮、交通手段の配慮（1件）
- ・参加料の免除、連合チームの編成、サテライト協力校での参加可（1件）

④高校総体県予選で運営方法の変更をしたか？



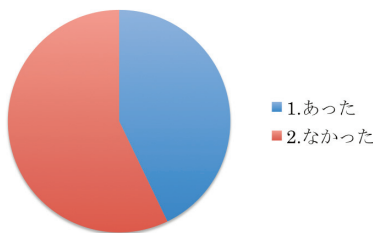
⑤高校総体県予選でどんな変更をしたか？

- ・地区によっては予選を中止した（1件）
- ・予選を中止し、県大会出場チーム数を増やした（1件）

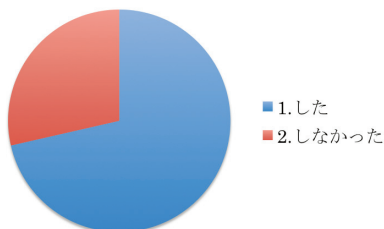
⑥放射線被曝低減のためにどんな変更をしましたか？

- ・競技時間の変更（1件）
- ・大会の中止（1件）
- ・会場を被曝の少ない地域に変更（1件）

⑦中学総体県予選で会場変更はありましたか？



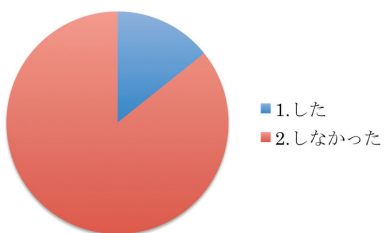
⑧中学総体県予選で被災地へ配慮をしましたか？



⑨中学総体県予選ではどんな配慮をしましたか？

- ・用具に関する特別措置（5件）

⑩小学全国大会県予選で会場変更をしましたか？

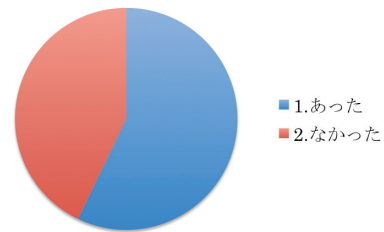


⑪小学全国大会県予選で被災地にどんな配慮をしましたか？

- ・地区予選免除など（2件）

・用具に関する特別措置（3件）

⑫一般の大会で会場変更はありましたか？



⑬一般の大会会場変更理由は何ですか？

- ・会場が被災地域だったから（4件）
- ・会場が避難場所になっていたから（2件）

⑭震災のため中止になった大会はどのくらいありましたか？

| | 高校 | 中学 | 小学 | 一般 |
|------------|----|----|----|----|
| 全国レベルの大会 | | 1 | 1 | |
| ブロックレベルの大会 | 7 | 1 | 1 | 2 |
| 県レベルの大会 | 3 | 1 | 2 | 5 |
| 地区レベルの大会 | 6 | | | |
| ローカル大会 | | 2 | 1 | |

⑮震災後の大会開催について、考慮したことや苦労したことを教えてください。

- ・放射線の問題が大きかった。開催するために専門家を呼んで研修会を実施した。
- ・雨天時の対応など今後とも課題が多い。
- ・サテライト校は県内各地に部員が分散しているため、日常の活動が困難である。また、生徒数減少による生徒会費の減収のため、今後の活動が極めて厳しい状況にある。生徒の活動を支援する対応が必要である。
- ・被災地では、野球場が被災し使用できない、校庭などは仮説住宅用地となっているなどで練習会場がない、用具がない、チームの運営ができない。
- ・ナイター設備が使用できなかった。
- ・4月は県大会を自粛した。

2) 現地聞き取り調査

<末崎野球スポ少 保護者 高淵さん>

3月末から練習開始。まだ早いんじゃないかという声もあったが、家が流された子どもの親が、是非野球をやらせてほしいということで始まった。何もしていないと気が滅入ってしまうらしい。昨年全国大会に出場し、今年も県大会で優勝しているので、全国につながる大会が近づいており、その大会に合わせて練習しようということで始まった。

仮設住宅が野球場に建ち、練習場所が無くなってしまった。交流のあるチームが遠征先に、お風呂まで用意してくれて誘ってくれた。活動始めた最初は、電気が使えなかったので、練習着を汚してしまうと全ての家庭で洗濯機が使えず、手で洗うことになって保護者の負担が大変だった。



グラウンドが使えず簡易練習場で練習するスポ少野球チーム

<米崎中テニス部 コーチ>

小学校が被災して使えなくなったため、中学校が場所を提供している。テニスコートは仮設住宅が出来て使えなくなったため、平日は駐車場にラインを引いて、簡易のネットを張って練習している。週末はバスや保護者の車で遠征して練習している。コーチ自身も家を流され、明日から仮設住宅に入る。子どもたちはテニスをやりたがっているので、きついが活動を続けている。沿岸地域の中学校の中には強豪校があったが、満身に練習出来ていないため、今回の大会では勝ち上がれなかった。ときどき、バス送迎の支援があるので利用している。



テニスコートが使えず駐車場にラインを引き、簡易ネットを張って練習するテニス部

<石巻ライノスラグビークラブ監督 石母田さん>

大会はなくなっていないが、会場が変わった。また時期もずらして行った。

部員の減少はみられない。5月の連休明けくらいから練習は始めた。私自身が避難所から通ってきていたので大変だった。クラブの小学5年生一人が亡くなった。女川のラグビークラブには避難所から通っていた子どもは結構いたらしい。バスケのスポ少は6月まで全く活動していなかった。体育館は避難所になり活動場所がなかった。石巻地区で大会をする場所もなく、全国大会自体なくなったので、活動しようとはならなかった。ラグビーのような外の種目はここ石巻専修大でも他でも出来るので比較的活動しやすい。逆に他で出来なくてここで練習するクラブが増えている。

<石巻ライノスラグビークラブコーチ 伊藤さん>

震災後、全く来なくなってしまった家族は二家族だけ。前より来る回数が減った子どもは4,5人いる。被災して家がなくなったりして親が送り迎えする状況にない。

遠征に誘われているが、親の送迎が必要なときは、50人の参加家族が半分くらいになる。バスが出せばいいが…。そのため、なるべくこっちに来てもらうようにしている。

6月までは被災者やボランティアがたくさんで活動する場所が無かった。

トップリーグの選手が来てくれたりした。みんな何らかの被災をしていて金銭的にも大変なので、月謝は安くしている。協会の登録費は今年度免除されている。



避難民やボランティアが移動し、やっと使えるようになったグラウンド

<女川第二小学校 教頭 阿部先生>

高台にあるので、小学校自体は津波被害から免れた。現在3つの小学校が一緒になっている。グラウンドとプールを一般に開放し、多くのスポーツ団体が時間を区切って使っている。体育館は現在役場になっていて使用できない。

4月中は自衛隊がグラウンドに詰めていたので、スポーツ活動ができなかったが、自衛隊がいなくなって5月中旬頃から活動し始めた。活動をするにあたって、必ず親が車で連れてきていた（子ども一人では出たくなかった）ので、それが大変だったようだ。

ここのグラウンドのような高台の平らな土地は次々に仮設住宅が建っているのので、ここも今後仮設が建つ可能性があるが、子供たちの運動する場所がないので、できるだけ残したい。



仮設住宅が建てられ、使えなくなった野球場

5. まとめと今後の展望

本調査の結果、被災した地区の小さな大会は中止したところもあったが、大きな大会はほとんど開催されていた。ただ、震災によって会場が破損したり、避難場所になって会場が使えないなどの影響があり、会場変更を余儀なくされた大会が多かったことが明らかになった。そしてその影響は春先に大きな大会の予選が開催される高校生の大会が最も大きな影響を受けたことが分かった。しかし大会に向けて、練習場が使えないなどの厳しい状況、環境の中でも、選手達は早い時期から練習を再開し、工夫して積極的に練習をしていたことが明らかになった。震災発生当初は、被災者の厳しい状況や心情を考慮してスポーツ大会、スポーツ活動を自粛すべきという世論もあったが、むしろ被災した当事者がスポーツ活動・大会の開催を望んでいた実態が明らかになった。

しかしその一方で、被災者の生活支援を最優先する方針により、学校や公共のグラウンドが次々に仮設住宅で埋められ、体育館は行政機関や支援物資保管場所となって、子どもたちがスポーツ活動をする場所が無くなっていることが分かった。スポーツや運動ができなくなれば、それまでスポーツ活動を楽しみにしていた子どもたちは心のよりどころを失い、ストレスをため、エネルギーをもてあまして、健康や生活上の様々な問題を引き起こしかねない。このような事態が起こったときこそ、運動、スポーツ活動の重要性、必要性をしっかりと認識して、行政が運動・スポーツ活動場所の計画的確保に努めることが大切である。

東日本大震災後のスポーツ大会実施状況と被災地のスポーツ活動状況に関する調査



小川 宏、杉浦弘一（健康・運動学系）

・研究の目的

3.11に発生した東日本大震災によって多くの地域が被災し、従来行われてきたスポーツ大会は変更を余儀なくされた。そこで本研究では、岩手、宮城、福島、茨城各県のスポーツ協会・団体に対し、各協会が震災後のスポーツ大会にどのような対応策を講じたのかについて、アンケート調査を実施した。また、岩手県および宮城県の沿岸地域に出向き、震災後のスポーツ活動状況について、インタビューによる調査を行った。

・調査結果

(1) アンケート調査

- ・インターハイや中学総体予選では多くの試合会場が被災のため変更になっていた。会場施設が被災していなくても、支援物資の保管場所になっていたり、仮設住宅が建てられていたり、また放射線量の問題で変更となったところもあった。
- ・被災地での地区予選を中止し、参加チーム数を増やして県大会を行うなどの対応も見られた。
- ・被災地域のチームには、ユニフォームなど用具に関して特別措置を施していた。
- ・高校は春に開催される大会が多いため、中止となった大会も多く、影響が大きかった。

(2) 被災地インタビュー調査

<末崎野球スポ少 保護者 高瀬さん>

3月末から練習開始。まだ早いんじゃないかという声もあったが、家が流された子どもの親が、是非野球をやらせてほしいということで始まった。何もしてないと気が滅入ってしまうらしい。昨年全国大会に出場し、今年も県大会で優勝しているので、全国につながる大会が近づいており、その大会に合わせて練習しようということで始まった。

仮設住宅が野球場に建ち、練習場所が無くなってしまった。、交流のあるチームが遠征先にお風呂まで用意してくれて誘ってくれた。活動始めた最初は、電気が使えなかったので、練習着を汚してしまうと全ての家庭で洗濯機が使えず、手で洗うことになって保護者の負担が大変だった。



グラウンドが使えず簡易練習場で練習するスポ少野球チーム

<米崎中テニス部 コーチ>

小学校が被災して使えなくなったため、中学校が場所を提供している。テニスコートは仮設住宅が出来て使えなくなったため、平日は駐車場にラインを引いて、簡易のネットを張って練習している。週末はバスや保護者の車で遠征して練習している。コーチ自身も家を流され、明日から仮設住宅に入る。子どもたちはテニスをやりたいがっているの、きついが活動を続けている。沿岸地域の中学校の中には強豪校があったが、満身に練習出来ていないため、今回の大会では勝ち上がれなかった。ときどき、バス送迎の支援があるので利用している。



テニスコートが使えず駐車場にラインを引き、簡易ネットを張って練習するテニス部

<女川第二小学校 教頭 阿部先生>

高台にあるので、小学校自体は津波被害から免れた。現在3つの小学校が一緒になっている。グラウンドとプールを一般に開放し、多くのスポーツ団体が時間を区切って使っている。体育館は現在役場になっていて使用できない。

4月中は自衛隊がグラウンドに詰めていたので、スポーツ活動ができなかったが、自衛隊がいなくなって5月中旬頃から活動し始めた。活動をするにあたって、必ず親が車で連れてきていた(子ども一人では出してくれなかった)ので、それが大変だったようだ。

このグラウンドのような高台の平らな土地は次々に仮設住宅が建っているの、ここも今後仮設が建つ可能性があるが、子供たちの運動する場所がないので、できるだけ残したい。



仮設住宅が建てられ、使えなくなった野球場

・まとめと今後の展望

本調査の結果、被災した地区の小さな大会は中止したところもあったが、大きな大会はほとんど開催されていた。またその大会に向けて、厳しい状況、環境の中でも積極的に練習を再開していたことが明らかになった。震災発生当初は、被災者の厳しい状況や心情を考えてスポーツ大会、スポーツ活動を自粛すべきという世論もあったが、被災した当事者がスポーツ活動・大会を望んでいる実態が明らかになった。

しかしその一方で、被災者の生活支援を最優先する方針により、学校や公共のグラウンドが次々に仮設住宅で埋められ、体育館は行政機関や支援物資保管場所となって、子どもたちがスポーツ活動をする場所が無くなっていることが分かった。スポーツや運動ができなくなれば、それまでスポーツ活動を楽しみにしていた子どもたちは心のよりどころを失い、ストレスをため、エネルギーをもてあまして、健康や生活上の様々な問題を引き起こしかねない。このような事態が起こったときこそ、運動、スポーツ活動の重要性、必要性をしっかりと認識して、行政が運動・スポーツ活動場所の計画的確保に努めることが大切である。

【お問い合わせ先】

960-1296 福島市金谷川1 福島大学研究協力課
TEL: 024-548-8009 E-mail: kyoudo@adb.fukushima-u.ac.jp